

Title	朔さんのこと
Sub Title	
Author	横部, 得三郎(Yokobe, Tokusaburo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.317- 329
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0317

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

やに酔わせてみて、馬鹿をいわせたら、どんなに愉快だろうかなどと、とりとめのない空想をして、楽しくなることがあるが、どうもこれはとどのつまり空想で、とても実現させることはむずかしいらしい。

烏兎匆匆、半世紀は夢のように去った。中野洋服店、菊洋堂、藪そば、江木写真館、淡路小学校、多賀羅亭、中川

朔さんのこと

朔さん。(朔さんと呼んでも失礼ではあるまい。そう呼ばせて下さい。この呼び音は極めて Sympathique な響きを持つているように私には感じられるから。)朔さんがもう還暦とは、自分の年をとったことを忘れて、年月の経つことの早いことを痛感させられる。この機会に朔さんの過去を特に朔さんの文筆活動の初期の頃をいささか回顧して

牛肉店と、こう埒もなくあの当時のいまわりの名前をあげてゆくと、佐藤君もきつと淡路町時代のことを、あざやかに思いだしてくれることであろう。

還暦といえは、人生の中入りである。これからトリマで、とにかく当日のいい芸がならぶはずだ。お願いしますよ佐藤君!

横 部 得 三 郎

みたいと思う。朔さんの塾の仏文科のために果した功績は今更云々するまでもない。もしポドレルがいなかったら、フランス文学はどうなっていたであろうかなど考えるのは、クレオパトラの鼻が曲っていたらなど想像するのと同じく、愚かなことであろうが、もし朔さんがいなかったら、塾の仏文科はどうなっていたであろうかなど、勿論結論

など出るわけのものでもないが、考えてみたくもなる。朔さんが、塾のためにも日本の学会のためにも健在であることを祈る次第である。

さて朔さんは昭和五年（一九三〇年）に塾仏文科を卒業される。最初、経済学部予科に入学したが、学部に進むとき、即ち昭和二年（一九二七年）に仏文科に転科した。この動機については甚だ興味を引かれるのであるが、ここでは触れないことにする。この頃は名古屋高商に勤務していて、東京へは病身の母を見舞うこともあってときどきは上京したが、塾周辺とは全く疎遠になり、また塾関係の（東京のといってもよいが）文学研究活動に関する情報を得る機会が少なかった。というよりもそういう情報を得ることに熱心ではなかったという方が本当であろう。昭和三年（一九二八年）には一月一日付で広瀬哲士先生監修の月刊誌「仏蘭西文学その他」が発行されている。此度私は「朔さんのこと」を書くに当って、塾の図書館からこの月刊誌を借出してその全貌を始めて見た次第である。次いで

同年九月には日本現代詩壇史上特筆すべき季刊詩「詩と詩論」が発行される。朔さんは学生時代にこの両誌で大いに活躍するのである。

「西協順三郎全詩集」の巻末の年譜を見ると、

昭和二年（一九二七）三十四歳

十二月、日本最初のシュルレアリスム・アンソロジー

―「馥郁タル火夫ヨ」（佐藤朔編集）に序文と作品を
発表。メンバーは順三郎・滝口修造・上田保・佐藤朔

・三浦孝之助・中村喜久夫の六人であった。

とある。朔さんは文学部一年のときのことである。私は不幸にしてこの書をいまだに手に取ってみる機会がない。西協順三郎先生は大正十四年十一月ヨーロッパからシュルレアリスム旋風を伴って神戸に上陸、翌十五年に文学部教授となり、このときから朔さん始め若い文学青年達との交友が始まる。「馥郁タル火夫ヨ」はその一つの結晶であって、

塾の文学運動の歴史の上で、少くとも朔さんにとって貴重なモニュメントであるに違いない。

さて次に「仏蘭西文学その他」であるが、その誌上に掲載された朔さんの仕事を追って触れてみよう。

第一巻第一号ポドレールの Dandy（「浪漫的芸術」の中の「現代生活と画家」の一節）の訳。

第二号（昭和三年二月）アポリネールの「聖アドラタ」の訳が載る。アドラタとは「礼拝される（または熱愛される）女」の意で、いかにも尤もらしいアポリネール式新造聖女名と思はれる。これはハンガリーのある小さい教会で拝観させられた聖櫃のことについて、一人の老人からひそかに聞いた告白談。この聖櫃は実はこの老人と一緒に旅行中に死んだ愛人の死体を巧みな手術で木刀伊にし、石棺に納めてその上に A D O R A T A の文字と十字架を刻み、毎日拝んでいたが、一年ばかり旅行するため空地に埋めて置いたところ、帰って来てみたら、発掘されたローマ時代のキリスト教殉教者の聖櫃となり、五十年後には石棺の中の

愛人が聖者の中に加えられていたという物語。アポリネールのものはみな面白いが、「聖アドラタ」の訳がここにあるとは驚いたことである。

第三号（三月）「ジャン・コクトオ詩抄」として、「エクス」（セザンヌの生地）、「ドン・ジアンドの墓」以上「詩集」より二篇、「廢墟」、「ミロのヴィーナス」、「青い錨」で以上「オペラ」より三篇がある。その後「コクトオの詩集『オペラ』」に対する短い評が訳されている。朔さんはここで始めてコクトオに手をつけたのである。モランは言う。「ジャン・コクトオは昨年（一九二七年）の十月に新しい詩集「オペラ」を我々に提供した。「詩集」の中の、別して物悲しげな又深みのある調子を持っている死を取扱ったいくつかの詩篇が既に新らしい表現を我々に予言していたのであるが、「オペラ」はこの予言を我々に向って確実にしているものである。この詩集の素晴らしい詩にはコクトオが以前から取扱っていた主題のいくつかが含まれている。つまり、死、見えざるものとの会話……コクトオは

夢の世界に飛び込む。そうしてそこから、我々のために、美しい清新な完全なある物をもたらしてくるのである。」

朔さんはここでコクトオをつかみ始めた。

第五号（五月）　コクトオ詩抄「眠れぬ夜　或は　鳩の強盗」

第六号（六月）　コクトオ「職業上の秘法」、コクトオは言う。「……自覚めた睡眠者を驚かすために、風変りな対象や感情を遠方に求めることは益のないことである。これは下らぬ詩人の常套手段であり、……必要なことは、彼の心や眼が毎日触れているところのものを、彼が初めてそれを見たかのように、そうして初めて感動するかのようにはれる角度と速力とによって彼に示すことである。これが正しく人間に許された唯一の創造である……」

第八号（八月）　コクトオ「コント」。その同じ頁の下の欄に、コクトオ「アルテュル・ランボオ」の訳。コクトオは言う。「何故、ラムボオが文学を捨てたかという問題は人人がしばしば考えることである。……カフェに飽き、而

もこの美しい世界は自殺するだけの価値がないと思い、それに自殺ということは少し滑稽であると思っていた彼は、唯一の可能な解決を撰んだのである。……創作することはその内でも詩を書くことは発汗作用に等しい。作品は一種の汗である。汗を流さずに駆けたり、遊戯をしたり、散歩をしたり、力業をすることは、不健康的である。……アラルに居た頃のラムボオは汗をかかない詩的競技者の一例である。」

第九号（九月）　レエモン・ラディゲ「大詩人に与える助言」の訳。ラディゲは言う。「……個性のない詩人が僕等の忠告に従うとなると惨めである。裸になって見せたところで彼等は何の得る所があらうか。……」

真の優雅は目立ってはならぬとよく云うがこれは至言である。天賦豊かな幾人かの人だけが真の優雅というものに気がつくのである。

僕がここで云う平凡に就いても同様である。今日、此の平凡味を備へている音楽家は数人いる。そうして詩人の中

から採してみると、先づマクス・ジャコブとシャン・コクトオである。……」

第十一号（十一月）ランボー「ゆふぐれの演説」（詩）の訳。その下の欄に、「ランボーとロートレアモン」についてのスーポオとジイドとヴァレリの短文の比較批評の訳が載っている。ここで朔さんはラムボーに手をかける。

第十二号（十二月）ランボーの詩二篇の訳、「災禍」^{ミザル}、「皇帝の憤怒」。

第二巻第三号（昭和四年三月）「あるアンブレッシヨ^ン」。これは朔さんのあるスペインの踊りの散文詩的印象記である。この年の一月頃スペインの舞踊家アルヘンティーナが日本に来て一大興奮をまき起した。この号は表題にはないけれどもアルヘンティーナ特集号みたいなものである。「ある踊りは実に淋しい」から始まり、「バラ色のコステウムが揺れる。その裏で黒と白とが揺れる。その色彩に人びとは刺戟され、そのカスタニエットの音によって止めを刺される。Bravo! そうして人びとは靴を踏みならし

て、もう一度殺されようとするのである」で終るのであるが、その中の「その眼の動きによって西班牙を描く」は非常に私の気に入った一句である。これが私が朔さんの詩に接した最初のものであって、前述の「馥郁タル火夫ヨ」の中にも朔さんの詩があるそうだが、それにいまだお目にかかっていないのは残念である。

この号にアンドレ・ブルトンの「新しき精神」の短い訳が載っている。この原文はどこにあるのか調べてみる暇がない。「一月十六日、月曜日、五時十分、ルイ・アラゴンはボナパルト通りを上って行った。」その時美しい一人の少女が目につき、気を引かれる。彼は喫茶店「二匹の猿」でブルトンに会い、その少女を中心起ったことを話す。二人は事の真相を知り度いと思った。その時アンドレ・ドランに会い、彼等の興奮の理由を話しかけると、彼等を遮って、ドランの方から少女のことを話す。「六時、ルイ・アラゴンとアンドレ・ブルトンはこの謎を解くことが諦められず、第六区の方を少し探し廻ってみた。だがそれは無

駄であった。」この話はアラゴンが見た少女のことと、ドランが話した少女のことに興味があるのだが、一見その描写の仕方には余りシュウルレアリス的なものを感じられない。あるいはそれでよいのかもしれない。話の裏に妙味があるらしいから。

「仏蘭西文学その他」はこの後九月と十一月が休刊になって、十二月に第十号が出て、それが最後で廃刊になったらしい。この二年ばかり続いた月刊誌には、朔さんの他に、私にとってなつかしい物故した、あるいは現存の友人知人が多数執筆している。昔が僥^トばれて頁を繰っていて飽きない。朔さんはこの第三巻第三号以後は執筆していないらしい。それもその筈である。「詩と詩論」が朔さんを待っていたからである。ここで「詩と詩論」に移ることにするのが、ここまで来たときに、朔さん自身から大変なことを聞いてしまった。それは「仏蘭西文学その他」に「鳥巢公」またはJossの名で書いているのは実は自分だ、というのである。今までは「佐藤朔」の名義で書いているものだ

けを順に追ってきたのであるが、その中に「鳥巢公、[Toi] 名儀のものを入れなければならなくなった。それが三篇や四篇なら兎に角、二十篇ばかりある。朔さんはそれはそつとして放っておいてよい、と言はれるけれども、鳥巢公が佐藤朔と同人である以上放っておくわけにはゆかない。と言って初めから遣り直し、各号毎に「朔」と「鳥巢」を一緒に整理して書き直すには、とてもはやその余裕がない。鳥巢^ト名のものだけを別にまた挙げてゆくことにする。「仏蘭西文学その他」には毎号巻末に青色頁^{イシヅメルト}というものが二、三枚づつ付いていて、それは色々の紹介欄―書籍欄・音楽欄・絵画欄・演劇欄・映画欄・消息欄―になっている。その欄にも鳥巢氏はよいものを諸号に書いている。これが学生時代に書かれたものだと思うと驚く程立派なものを多方面にわたって書いているのである。

第一巻第五号（昭和三年五月） フィリップ・スーポー「着色写真」の訳。この訳は五頁余りだからこの誌（詩は別として大体一頁四段ぬき）では長い方である。「ジュリ

アンは眠っている。彼は何をしている。軒をかいている。彼は何をしている。夢をみている。そうして一匹の蠅を追っている。ジュリアンは目覚める……」で、創作家ジュリアンの一日が始まる。「彼はやっとキャフェ・グロヴに到着する。直ぐにピコン・シトロンと何か書くものを注文する。」詩を書き出す。失敗する、スーポーはだらだら書きたてるが、面白い。

第六号（同年六月） レエモン・ラディゲ「花を売る少女」の訳。馴化園の白鳥が盗み出された。盗み出したのは花売り少女アリエヌだった。「アリエヌの部屋の壁には、ジュピテルに誘惑されているレダの色刷りが掛けていました。昔の神話のことを知らない少女は、ただレダの中に一人の競争相手を見付け出しただけで怒っていました。」この頁の下段の余白に、イヴァン・ゴルの詩「無線電話機」の訳がある。

第七号（同年七月） ギイヨーム・アポリネール「男女倶楽部の奇遇」の訳。コロンビアの鉱山で二十年も働いて

金を貯えた和蘭人技師ヴァン・デル・ヴィセンは待望のパリへやって来た。ある友人の勧めでトロカデロ附近の男女倶楽部組織の賭博場に入った。「紙幣はまるで雪の様に彼の指の間で溶けて消えた。」傍で髪は鶯色で両眼の縁を染めたたをやかな大柄の若い女が、思う存分勝ち続けている。彼は彼女に、彼女の金と宝石に対して押え切れぬ情熱を感じた。……遂に彼女の瀟洒なアパルトマンまで送った。「彼女が鏡の前で両腰を差し上げて帽子を脱いでいる隙に彼に跳びかかってその頭を抱こうとした。」……「彼は筋骨逞しい青年にいい寄ってしまったのだ。」……「叫び声がした。人人は拳銃の音を聞いた。あくる日、人々はこの奇妙な敵同志が」互に寄り添うて死んでいるのを見出した。

第九号（同年九月） ロベエル・ド・モンテスキウの詩一篇「骨董商の祈禱」の訳。その頁の下段に、鳥巢氏のこの詩人についての簡単な紹介が載っている。それによると、コント・ロベエル・ド・モンテスキウ・フザンサク（一八

五五―一九二二）は由緒正しい名門の出であって、彼自身の御家自慢によれば、欧州に散在する名家名門の殆んど全部と親類附合をしている大した家柄である。彼が一八九二年に彼のデビュー作詩集「蝙蝠」を出した時、当時の詩壇に一問題を惹き起した。彼は詩人であるか？アマチュアであるか？と人々は議論したのである。しかしそのことについてムキになって議論しなくてもよいであろう。今日はアマチュアの方がかえって純粹詩を作ると云うから。二十余冊の詩集に収められている彼の夥しい作品の中にはだいぶムラがあつて、詰らない詩も多くあるらしいが、時には清新な感情に溢れた唐草模様のような形態の詩も書いて一流の詩人たることを示している。しかも彼は十分な憂鬱味と神秘的な所を持っている。ともかく彼は仏蘭西文学史にとどき顔を出す「変り種」の一人であることに間違ひはない、と鳥巢氏は解説する。

第十号（十月）ブレエズ・サンドラルの詩一篇「象狩り」の訳。二頁にわたるこの詩の下段にサンドラルについて

の Tos の紹介がある。西班牙人で世界的な旅行家であるサンドラルは確かにマクス・ジャコブの云う「モンディアリスム」世界主義の詩人である。彼の描く風景は借り物でも、単なる空想でもない。幼稚なエキソティスムの傾向を嫌うジャン・コクトオが彼の作品を真のエキソティスムとして折紙をつけたのもサンドラルが旅行家であり冒険家であつたればこそである。そして Tos はサンドラルの独特の詩の美しさ、魅力を挙げている。

第十一号 (一) マリイ・ロオランサン動物詩集より「馬」「獅子」「縞馬」の訳。下段にジャン・コクトオの「Moderne」について、詩人が作つた言葉「モダンな様式」「モダンな詩人」「モダンな精神」などの「モダン」ということについてのコクトオの一片の随想の訳がある。

(二) スーパー「或る黒人の話」の訳

第十二号 アンドレ・ブルトン Nydia のある断片訳

第二卷第一号（昭和四年一月）Anecdotes（コクトオとスーパーに関する随想）シュルレアリスの一派とコクト

トオとは昔から仲が悪るい。Tosはここでは詩に対するコクトオとシュルレアリストのスポーとの意見の相違を究明しようとしている。

第二号(同年二月) イヴァン・ゴルの詩「モンパルナス停車場」の訳。二頁にわたるこの訳詩の下の欄で、Tosはイヴァン・ゴルを巧みに面白く紹介している。クレエル・ゴル夫人のことに触れている。西脇先生はイヴァン・ゴルが好きだが、彼について書いたものを私は他に見た記憶はない。朔さんはこれを書いたときは、二十八年後にパリでクレール・ゴル夫人のホテル住いの住居を訪ねるなどとは夢にも思はなかったことであろう。(朔著欧州旅行記「セーヌ河畔みぎひだり」の「孤独の詩人イヴァン・ゴル」「クレール・ゴルのこと」参照)

第五号 Photographie (写真四葉)「写真! それはシネマと共に新しい芸術である。それは廿世紀の絵画である……」と前書して、ウジエヌ・アトジエとジェルメエヌ・クルクの撮影した写真それぞれ二葉づつ掲げ、前者にはア

ルベル・ヴァランタン、後者にはフロラニ・フェルの解説を訳している。

第七号 アンドレ・モーロア「今日の文学と若い人達」

第八号 アンドレ・ジートの「コンゴ旅行」から「航海

中七月二十五日」「ロメ八月二日」「カトウヌ八月二日」

第十五号(十二月) ピケイとコクトオ。コクトオがピ

ケイからマリタンへ送った手紙の一節。Tosの解説によればピケイはポルドー近くのアルカシオン湾にある小村。レイモン・ラデイゲはここから兵隊にとられて巴里で死んだ。ここにはコクトオ、ピエル・ブノワ、ケランシス・カルコ、ジョゼフ・ケッセル等がいた。

さて次に前述の青色頁バイジエレットである。

第一巻第六号 音楽欄、「エリック・サティ」(一八六六

—一二二五)後にコクトオの *Le Coq et l'arlequin* からサ

ティの死を惜しむ文の訳が付いている。

第七号 絵画欄 ポル・モーラン「Jean Hugo」の訳

第八号 絵画欄「マルク・シアガル」この一文は主に

Philippe Soupault のシャガル小論によると Tos は追記している。

第九号 絵画欄 フェルナン・レジュ

第十号 音楽欄 ストラヴィンスキイの「アポロン」

第二卷第三号 音楽欄 (一)ミロオの「世界創造」(ブレ

エズ・サンドラルスがその台本を書いた黒人舞踊について
いる音楽) (二)ストラヴィンスキイの新作 (「妖精の接吻」)

(三)ラベル「ポレロ」

第七号 書籍欄 くうりえ りてれえる (一) Le Surre-

alisme en 1929 (ブリュッセルから出ている芸術雑誌

VARIETES の臨時増刊号)。 (二)エリュアールの詩集 „L'

Amour, la Poésie ” とエリュアールがこれまで出版した詩

集のリスト。 (三)ラムボオ研究、若い作家達の雑誌 Le Grand

jeu の第二輯 (一九二九年春) がラムボオ号として発行。

ラムボウの未発表の手紙、手記、詩の断片及び詩家の論を
掲載。 (四)ヴァレリ全詩集豪華限定版の出版。その他十二項

目。

第十号 書籍欄 ジャン・コクトオ「恐ろしい子供」の

ジョゼフ・ケッセルの評。「世間の誤解を受けている点で、

コクトオほど適切で完全な例はないであろう。……地上で

最も陽気な最も輝しい最も幸福な人間であるらしい彼は最

も絶望的な人間なのである。……「大股開らき」のジャッ

ク、賈公子トマ、オルフェの硝子屋やその他多くの人物を

書いた後に、最も感動的な、最も恐るべき子供たちに力と

生命とを与えたコクトオの代りをつとめることは誰にも出

来ない。」実はケッセルの一言一句が面白い。鳥巢氏がケ

ッセルの文をとり上げて訳した明敏な慧眼には敬服する。

私が借出した「仏蘭西文学その他」によると、この月刊

誌は昭和四年十二月発行の第二卷第十号で廃刊になる。一

方季刊誌「詩と詩論」はこの同じ月に第六冊が出ている。

そこで急いで「詩と詩論」の誌上での朔さんの文筆活動に

とりかからねばならないのだが、私の最初の予想に反して

「仏蘭西文学その他」に余りにも紙面を使い過ぎたので、

余りこの季刊誌にかかわることはできない。

ところでこの「詩と詩論」は昭和三年（一九二八年）朔
さん文学部二年のとき、安西冬衛・飯島正・上田敏雄・神原
泰・北川冬彦・近藤東・滝口武士・竹中郁・外山卯三郎・
春山行夫・三好達治（アイウ順）を同人とし、厚生閣書店
から出版されることになった。第一冊はその年の九月、口

絵にキリコ筆「詩人の出発」を掲げて発行された。後記を
見ると「……われわれが、いまここに旧詩壇の無詩学的独
裁を打破して、今日のポエジーを正当に示し得る機会を得
たことは、何んという喜びであろう。……この冊子は、わ

れわれ十一人の同人よりなる結束的権威機関というより
は、むしろわれわれ十一人の同人の支持よりなる一つの詩
壇的な主導機関である。……」とあって、同人及び執筆者
の意欲は発刺と燃えていた。それが、昭和四年九月発行の
第五巻になると、同人制を止め、春山行夫が編輯者とな
り、前記同人に、大野俊一・笹沢美明・佐藤一英・佐藤朔
・滝口修造・西脇順三郎・堀辰雄・横光利一・吉田一穂・
渡辺一夫が加はって「寄稿者」となった。同人制のときも

寄稿者制になったときも、他に多くの執筆者があった。そ
れがまた昭和五年六月発行の第八冊になると寄稿者組織を
解体し、春山行夫が責任編輯者となって発行され、昭和六
年十二月第十四冊まで続くのである。（塾図書館から借用
の「詩と詩論」による。）

いよいよ朔さんが本舞台に乗り出して来たところで、筆
を置かねばならないのは遺憾であるが、せめて「詩と詩
論」で朔さんが取扱った項目だけでも挙げて置こう。

(1) ジャン・コクトオ（エッセイ）〔第二冊〕 (2) アンドレ・
ブルトン「Data」二つの宣言書〔第三冊〕 (3) 世界現
代詩人レヴィユ・フランスの項 ギイヨム・アポリネール
〔第四冊〕 (4) 同じ項 シモンヌ・ラテル「ジャン・コクト
オ」と語る（訳）〔同上〕 (5) ジャン・コクトオ「職業の秘
密」（訳）〔第五冊〕 (6) アンドレ・ブルトン、ポオル・エリ
ユアル「ポエジーに関するノート」（訳）〔第七冊〕 (7) ロジ
エ・ヴァイヤン「アルテュウル・ランボウーまたは人間に
対する戦争」（訳）〔同上〕 (8) 今日の世界文学展望―今日の

アメリカ文学（鳥巢公）〔第八冊〕(9)ポオル・シヨヴオ「山師ジャン・コクトオ（訳）〔第九冊〕 (10)アンドレ・ブルトン「超現実主義と絵画」滝口修造訳（書評を兼ねた随想）〔同上〕 (11)ヴァレリイとシュルレアリスト（評論）〔第十冊〕 (12)シュルレアリスムの場合（試論）〔第十一冊〕 (13)コクトオ「マリタンへの手紙」堀口大学訳（書評） (14)モノロオグ アンテリウル（随想）〔第十二冊〕 朔さんは「詩と詩論」時代に仏文科を卒業したのであった。

昭和三十八年十月十一日、十二日京都で日本・フランス語フラン文学会大会があった。十二日の午前のことである。会場の岡崎会館に行て、用もなかったが、朔さんを探すともなく探してみたが、こんな場合いつもいる朔さんの姿が見当らない。休憩時間にぶらぶらしていると、二階の人気のない部屋で朔さんが廊下に背を向けて何か書きものをしてる。忙しいのだな！ とその時思った。午後になった。ジャン・コクトオが死んだそうだといいことを耳にした。そして夕刻になって朝日新聞の朝刊を手に入れるこ

とができた。なる程コクトオは十月十一日午後一時パリ南郊ミリ・ラ・フォンの自宅で死去した。時に七十四歳と報じてある。もう少し詳しいパリ発電が載っていた。その後が続いて「堀口大学氏語る」とインタビューが載っていた。当然のことである。「十七歳で詩壇にデビューしたときからずっと世間を驚かせ続けた詩人だった。あれほどあらゆる分野に手を出して、しかも第一流の評価を得た芸術家は空前絶後なものではないか」と大学先生は言った。

学会が済んで翌十三日、朔さん白井浩司氏等と梶尾の高山寺を詣でた。出掛ける前に朝日の朝刊を買って置いた。計らずもその紙上に、前日の午前、学会の会場の一室で朔さんが筆を執って書いていた（その時私は始めて気がついたのだが）コクトオの追悼の記ともいふべき文が載っていた。朔さんは「仏蘭西文学その他」から始めて、「詩と詩論」と随分コクトオを取り扱ってきたが、また「セーヌ河畔みぎひだり」にもコクトオのことが出ているが、そしてそれも非常に面白いものであるが、この十月十三日の朝日

新聞の「コクトオの世界」は実に美事なものであった。朔さんのコクトオ論、コクトオ観はそこにおいて昇華したような感じがした。

かと思わざるを得ない。これで彼は今後、あらゆる仮面、仮装を脱ぎすてて、詩人らしく真に生き続けることができることであろう。

コクトオは詩人として晩年にいたるまでキザと思はれるくらい若さということを大切にし、その作品においても、その生活はにおいても、こどもらしい新鮮な驚異とか感激を失わないようにつとめていた。……

コクトオが死んだと聞いて彼もついに生の裏側にはいり、彼の好きなイマージュを借りれば、鏡の中をつき抜けて、真にポエジーの充溢する黄泉の国の住人になった

その日、周山街道ですくすくと高くのびている北山杉を見、高山寺で酒を頂き、老師の求めに応じて「よき酒よりもよきものはなし。われ飲む、故にわれ在り」と署名して、生き甲斐を感じ、朔さんの名文を思い出して、酒は益々甘まかった。しかし今から思えば、その日の朔さんはなんとなく沈んでいたようであった。

祝 辞

田 中 千 禾 夫

このところ佐藤君ともだいぶ会はないが、春頃であつ

たか、紀伊国屋ビル地下の食飲街の店で、宵の口、食事を